

聖徳太子讃仰

善光寺 聖徳太子像奉安にちなんで

横浜善光寺留学僧育英会理事 東 隆 眞

一

今年（平成六年・一九九四年）から数えて一四二〇年のむかし、わが国第三〇代敏達天皇（五三八―五八五）三年（五七四）、大和・飛鳥時代、聖徳太子は、橘豊日皇子（第三一代用明天皇。五八七崩御）、穴穂部間人皇女を両親として、大和盆地に生誕し、第三二代推古天皇（五四―六二八）元年（五九三）二〇歳のとき摂政（幼帝、女帝の代行。推古天皇は女性）となり、同三〇年（六二二）四九歳で死没した。

当時、わが国は、まだ統一的な国家としての形態がととのつていない段階ではなかった。崇仏派蘇我氏とこれに対する物部氏との確執が露骨となり、太子の周辺では親族間の熾烈な対立が生じ、政治状況もきわめて複雑な様相を呈していた。

このような内憂外患の渦中であって、太子は、朝鮮半島や中国大陸との交流をさかんにし、中国に遣隋使を派遣するなど彼の地の文化を移植した。蘇我馬子とともに力を合せて物部守屋を滅ぼした。一七条憲法、冠位一二階などを制定

した。蘇我馬子と天皇記、国記、本記などの国史を編纂した。このことは天皇制確立の萌芽ともなった。また、大阪に四天王寺、京都に広隆寺、奈良に法隆寺、飛鳥寺など七か寺その他を建立し、法華經、勝鬘經、維摩經などを講讀したと伝えられる。四天王寺には敬田、施藥、療病、悲田の四院を建てて、社会事業、福祉事業を実践した。

太子の五〇年に満たない、しかし波瀾に富んだ生涯とその事蹟は、日本歴史の発祥として、日本文化の魁として、日本人の代表の一人として、国民の生活意識の奥底に生きつづけて今日に至っている。百円紙幣、千円紙幣、一万円紙幣に太子の肖像や法隆寺夢殿が登場して永く親しまれた。

太子没して、ここに一三七二年、時を経るにしがたって、太子の生涯についてさまざまな異聞奇瑞を生み、その卓越した業績の評価も、評者

の立場によって、真偽、是非の論など、極端から極端に走ってとどまらず、いまなおその全貌は正確に把握されているとはいえないようである。それは、それだけ太子の常識を越えた存在の巨大さを裏書きするものに外ならないということであろう。

二

いま、聖徳太子と仏教とのかかわりに限っていうならば、実に、日本仏教は聖徳太子を度外視しては語ることは出来ないであろう。

太子が「一七条憲法」の第二条に「篤く三宝を敬え」と明示したことは、あまりにも有名である。

平安時代、比叡山に日本の天台宗を興した最澄上人（七六七？—八二二）は、来日した鑑真和上（六八八—七六三）の弟子、思託の発想をうけて、太子こそは天台宗第二祖南嶽禪師慧思

(五一四―五七七)の後身であるという。

また、高野山に真言宗をはじめた空海上人(七七―八三五)も太子の再来であるとする伝説が生まれた。

また、太子は救世観音の化身だとか、第四五代聖武天皇(七〇―七七五六)の後身だとか言われた。

鎌倉時代、法然上人(一一三三―一二二二)の高弟・証空上人(一一七七―一二四七)や一遍上人(一二三九―一二八九)も太子に深い尊崇の念を抱いた。

また、日蓮聖人(一二二二―一二八二)は、法華経を弘通した祖として太子を高く位置づけたのであった。

前後するが、親鸞聖人(一一七三―一二六二)にとつて、太子は「和國の教主聖徳皇」とまで称揚された。浄土真宗(真宗)は、太子信仰がもつとも盛んな宗派の一つである。

南北朝時代、中国禅門の初祖・菩提達磨大師を太子とする考えが生まれたい。太子を日本の禅宗の初祖とする太子信仰の一種である。

奈良の法隆寺には達磨大師の袈裟が秘蔵されているとか風聞したことがあるが、このような伝承も、右のことと無関係ではないであろう。

さて、太子は、世間を離れて山中で坐禅を好むばかりで法華経を広めようとしない小乗的な禅を否定している。しかし、菩提の果を得るには必ず禅定によると説いている。太子は、月に三度は法隆寺の夢殿に籠り、経文を写し、禅定を行うのが常であったという。坐禅を行い、経文を学び、社会、福祉事業を運営するという仏教の根本に対する正統的な理解のあり方を太子の事蹟に仰ぐのである。

三

わが曹洞宗の高祖道元禅師(一一〇〇―一一二

五三)と太祖瑩山禪師(一一二六八—一二三二五)は、聖徳太子をどのようにうけとめ、位置づけているのであろうか。

道元禪師は、『正法眼蔵袈裟功德』の巻で、「日本国には、聖徳太子、袈裟を受持し、法華、勝鬘等の諸経講説のとき、天雨宝華の奇瑞を感得す。それよりこのかた、仏法わが国に流通せり。天下の撰録なりといへども、すなはち人天の導師なり。仏のつかひとして衆生の父母なり。いまわがくに、袈裟の体色量ともに訛謬せりといへども、袈裟の名字を見聞する。ただこれ聖徳太子のおほんちからなり。そのとき、邪をくだき正をたてずば、今日かなしむべし」と書いている。

右によれば、聖徳太子は、袈裟を被着して『法華経』や『勝鬘経』などの諸経典を講説した。このことよって、仏法が日本国に流通したのであった。道元禪師は袈裟を着て仏道を学び、

仏典を講ずる聖徳太子に着目する。この意味において、まさに、聖徳太子は「人天の導師」であり、「仏の使い」であり、「衆生の父母」であると讃仰し、聖徳太子によつて日本仏教が始まったと、口をきわめて高く評価するのである。瑩山禪師は、『伝光録』の「第五十一祖永平元和尚」の章で、

「夫れ、日本仏法流布せしより七百余歳に、はじめて師(道元禪師を指す。東註)正法をおこす。

いはゆる仏滅後一千五百年、欽明天皇一十三壬申歳、はじめて新羅国より仏像等わたり、十四歳癸酉にすなわち仏像二軸をいれて渡す。然しより漸く仏法の靈験あらはれて、後二十一年といひしに、聖徳太子仏舍利をにぎりてうまる。用明天皇三年なり。法華、勝鬘等の経を講ぜしよりこのかた、名相教文天下に布く」と示した。瑩山禪師にとって、わが日本国の正法の元祖

は道元禪師なのである。

これを前提としてではあるが、いま聖徳太子が仏舍利をにぎって生れたとすること、そして『法華経』、『勝鬘経』などを講説したことによつて、仏教のことばや教えが天下に広まることとなつたという点に注目したい。

道元禪師四世の法孫としての瑩山禪師は、道元禪師を「日本の元祖」と位置づけて仰ぐのであるが、道元禪師は、聖徳太子を元祖という用語は用いないものの、「人天の導師」「仏の使い」「衆生の父母」と極言して、あくまでも稱揚するのである。

(ちなみに、右のとおり『正法眼蔵袈裟功德』の巻と『伝光録』「第五十一祖永平元和尚」の章は、法華経、勝鬘経の講讀のみを記して、維摩経の名をあげていない。一般に、聖徳太子の代表的撰述としては、右の三経を製疏したことが知られる。もつとも三経の義疏については近代

に至つて偽撰説が唱えられており、また、これに対する根強い反論がある。道元禪師、瑩山禪師がともに、維摩経を講讀したことを明記しないで「等」とするのは、日本書紀を根拠としているからなのであるかも知れないが、道元禪師は維摩居士の立場を認めないので、維摩居士を主人公とする維摩経を問題としないことが、ここにこうしたかたちで反映しているのではないかと推測される)。

四

このたび、曹洞宗、成寿山善光寺は、創立二十五周年の記念報恩行の一つとして、錦戸新觀仏師の一刀三礼の謹刻にかかわる聖徳太子像を奉安することとなつた。

敬礼拝見するに、この太子坐像(楠材一木造り。極彩色。総丈一二〇センチメートル。身長六〇センチメートル)は、奈良・法隆寺に秘蔵す

る国宝、摂政太子像に通ずる親しみ深い御姿である。

錦戸新観法眼は、わが国現代最長老の大仏師である。立正佼成会大聖堂の久遠実成釈迦牟尼如来像をはじめ、比叡山延暦寺根本中堂の伝教大師像、東京浅草の浅草寺の阿弥陀三尊仏、聖観音、梵天、帝釈天、仁王尊、地藏菩薩の諸尊像、東京音羽の護国寺の不動明王三尊仏像、神奈川の川崎大師平間寺の愛染明王像などなど、全国各地はもとより海外諸国にもその傑作は数多い。

善光寺の本寺・栃木県・太田原の名刹光真寺には同寺本堂の釈迦如来坐像、准胝観世音菩薩像、不動明王三尊仏像、文殊、普賢の両菩薩像などの諸尊像が安置されている。

善光寺には、不動明王脇侍の制吒迦童子、矜羯羅童子、大日如来三尊像（大日、弥陀、薬師）、法華経のレリーフ、十一面観世音菩薩像の

諸尊像が、すでに奉迎されている。

錦戸新観法眼は、明治四十一年（一九〇一）茨城県下妻市に生れ、青年時代、仏師をこころざして山本瑞雲師に師事し、また第二次大戦が終り、昭和二十六年（一九五二）天台宗の僧籍に入り、爾来、仏像彫刻ひとすじの人生を歩んでこられたお方で、平成四年、財団法人 仏教伝道協会のお教伝道文化賞を受賞された。

師によれば、「仏師が仏像を造るのは、本願主の心を己れの心として、仏の本願に帰依することである」（同師著『仏を彫る』）。仏師が仏の本願を正しくくみとり、その心を心として造りあげていくところに、仏師の本懐があるという信念と誓願をつらぬいてきたのである。

このたびの善光寺 聖徳太子像は、法眼最晩年の一大傑作といつて過言ではなからう。

どうしたことか、日本仏教の各宗派のなかで曹洞宗の寺院では聖徳太子を奉拝することはま

れである。日本の伝統仏教こぞって尊崇し、道元禪師、瑩山禪師また稱揚してやまぬ聖徳太子の存在について、曹洞宗の私どもは認識をあらためなければならぬ。

善光寺には釈迦殿がある。その中央の須弥壇上に曹洞宗のご本尊の釈尊の坐像がおまつりしてある。ただし普賢菩薩、文殊菩薩を脇侍とする釈迦三尊像である。

「宗祖（曹洞宗でいえば高祖道元禪師と太祖瑩山禪師の両祖）を通して釈尊にかえる」を誓願とする善光寺住職黒田武志師にとって、このたび、ここに聖徳太子をお迎えすることは、仏教の歴史的原点、宗教的発祥である釈尊に直結する道元禪師、瑩山禪師の教えを学び、実践する善光寺のゆくてに新しい大きな光をお迎えするにふさわしいものとなる。同時に、はからずも善光寺は聖徳太子をおまつりする曹洞宗寺院の先駆的な役割をになうことになった。

先にみたとおり、道元禪師は袈裟を被着する聖徳太子を讃美し、瑩山禪師は仏舍利をにぎって生れたという聖徳太子を讃嘆した。

黒田師は、つとに袈裟を国内はもちろん海外にまで普及することにつとめ、また仏舍利をわが国に将来するにあたって、多大の努力を惜しまない人である。ここに釈尊と聖徳太子と道元禪師と瑩山禪師につながる不思議な仏縁を痛感するものである。

とまれ、「世間は虚仮なり。ただ仏のみこれ真なり」と聖徳太子は教えをのこしている（天寿国繡帳銘）。善光寺聖徳太子像を拜して、この深い宗教的内省を、頂戴したいと願うものである。